

日銀神戸 支店長の 視点

別所昌樹氏



神戸市立博物館の「大ゴッホ展」を観てきました。故郷オランダの農村生活を題材とした画風が、印象派画家たちと出会ったパリで一変し、南仏アルルの明るい風土で新境地に至る。その変遷を語る展示でした。眺めるうちに、多様な風土と国境を超えた人の交流が生む欧州のダイナミクスに思いが巡りました。

ゴッホの死の数十年前後、その欧州は統合に歩み始めました。先駆けは、日本人を母に持つリヒャルト・クーデンホーフ・カレルギーが唱えた汎欧州主義でした。第2次大戦後は、欧州連合のもと、さまざまな産業の域内単一市場や、人の移動の自由などが実現されました。金融面でも、共通通貨ユーロが導入されました。

大ゴッホ展に思う「デジタルユーロ」

しかし、キャッシュレス決済に目を向けると欧州は単一になっていません。関係者の努力にもかかわらず各国それぞれの仕組みが残り、欧州内でも国を跨ぐ決済は国際カードブランドなど米国資本の独壇場です。こうした中、第2次トランプ政権後は特に、欧州の自律性回復という機運が加速しています。そして欧州中央銀行は10月、中央銀行デジタル通貨「デジタルユーロ」を早ければ2029年に発行する見通しを示しました。

中央銀行デジタル通貨とは、中央銀行が発行し、市民が日常生活で使う支払い手段ですが、紙幣と違ってデジタルです。欧州の自律性回復のようにそれぞれの国独自の動機もありますが、中央銀行が紙幣発行を通じて果たしてきた役割をデジタル社会でも果たし続け、決済システム全体を安全で効率的にすること。これは、多くの国に共通する課題です。日銀でも実証実験などに取り組むほか、世界の多くの中央銀行が検討を続けています。